

2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	堀 篤実
最終学歴	学 位	専門分野
金城学院大学人間生活学研究科博士課程 人間生活学専攻修了	博士 (医学、 岐阜大学)、 博士 (学術、 金城学院大学)	臨床心理学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

心理学の基礎知識や心理的支援に関する知識を身につけ、子どもを取り巻く様々な問題に対し、心理学の視点を持って対応できる能力を高め、少子高齢化社会を支えて社会で活躍できる保育者・教育者を養成することを目標とする。

(計画)

発達心理学、教育心理学、発達障害論、認知心理学、精神保健、子どもの保健 I B ではわかりやすい授業を心がけ、各分野の基礎的な知識を習得させる。また、ミニッツ・ペーパーとしての「学習のあゆみ」を用い、毎週、学生に振り返りを促すとともに教員の側からもコメントを記載し、翌週返却する。学生の記述から話題を膨らませ、学生が興味関心を持った内容についての授業展開を目指すとともに、受講者数が多い講義形式の授業においても学生の意見を汲み双方向の授業となるようにする。他の演習科目については学生のコミュニケーション能力やソーシャルスキルを高められるようグループワークを体験させる。また、学生が自ら問題意識をもってテーマを設定し、その解決策を探求することに努めて研究を進め、その成果をまとめてプレゼンテーションできるようにするなど、さまざまなアクティブ・ラーニングを展開する。さらに、自己学習を促すような働きかけを積極的に行うことに加え、自己学習のヒントやポイントを授業内で扱い、学生の授業に対する意欲を啓発していく。

○担当科目（前期・後期）

（前期）発達心理学、発達障害論、認知心理学、サービス・ラーニング実習 I、基礎演習 I、専門演習 I、専門演習 III

（後期）教育心理学、子どもの保健 I B、精神保健、教育・保育相談、サービス・ラーニング実習 II、基礎演習 II、専門演習 II、専門演習 IV、卒業研究

○教育方法の実践

学生の理解度を高めるため、授業にビデオ、DVD などの教材の導入、グループディスカッションを積極的に取り入れた。また、講義科目においてはパワーポイントを使用し教育的効果を高める授業を展開することによって、学生の学習意欲を刺激し興味を深め知識を習得させた。基礎演習 I 及び II では大学生活の基礎の修得や基礎学力の修得の支援を行なった。専門演習 I 及び II ではカウンセリングの基礎知識や技術についてグループワークを中心に学び学生のカウンセリングマインドを高めるとともにピアヘルパー（日本教育カウンセラー協会認定資格）の取得をサポート

ートした。また、専門演習Ⅲ及びⅣでは個々の学生の研究テーマに沿った研究及びその研究のプレゼンテーションの指導をした。

○作成した教科書・教材

授業ごとにオリジナルの教材を作成した。また、発達心理学、発達障害論、教育心理学、認知心理学、精神保健においては振り返りシートを作成し、専門演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳではワークシート、振り返りシートを作成した。

○自己評価

講義科目においては学生のニーズを感じとるため、「学習のあゆみ」という用紙に毎回、授業の感想を書いてもらい、それに対して教員がコメントを書き加え次回の授業で返却した。学生、教員の双方向でのやり取りを心がけ、全体で共有したほうが良い意見や質問をやり取りしたときは授業内で取り扱い、授業の内容を膨らませ他の学生とも共有した。演習科目においてはグループワークを積極的に取り入れ、より具体的、体験的授業を試みた。また、専門演習Ⅰ、Ⅱの受講生には積極的にピアヘルパー筆記試験の受験を促し、合格へと導いた。これらの結果、当初の目標・計画については、概ね目標を達成することができた。

しかしながら、学生の授業評価において今年度の「教育心理学」(2クラス開講)の1クラスにおいて例年より評定が低かった。この原因を究明するとともに今後の課題として学生が意欲的に授業に参加し、学生にとって学びの多い授業となるよう、さらなる授業研究をして改善していきたい。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

1. コミュニケーション能力及びカウンセリングの基礎知識を現場で生かすことのできる保育者、教育者の養成
2. 発達障害の傾向がある乳幼児に対する早期かかわりと子どもの自立を促す支援
3. 発達障害傾向の学生への就労支援のためのプログラム開発

○目標・計画

(目標)

《研究課題 1》

- ・学生のコミュニケーション能力を高める要因や背景を探ることにより、よりよい人間関係を築き他者から信頼される人格を形成できるようにする。
- ・地域諸機関での経験学習により、学生の成長・発達を促す。
- ・カウンセリングの基礎知識や技術を習得することにより、保育や教育の様々な場面で援助・支援することができるようにする。

《研究課題 2》

- ・発達障害の傾向がある乳幼児に対する早期のかかわりおよび親支援の効果について検証する。
- ・発達障害児の自立に向けた支援プログラムを開発する。

《研究課題 3》

- ・「発達障害」の診断に関わらず、発達障がい傾向を持つ学生の就労支援に向けたプログラムを開発し実践する。

(計画)

《研究課題 1》

- ・コミュニケーション能力の向上に関与する要因の検討をするとともに、保護者の様々なニーズ

や相談に対応できる保育者および教育者になるために、学生の中に習得すべきものについて検討をする。コミュニケーション能力を高めるための要素の一つとして、学生のソーシャルスキルに注目し、学生のソーシャルスキルについて検討する。

- ・地域諸機関での奉仕活動であるサービス・ラーニング実習を通じた経験による学びに関して学生の成長・発達に及ぼす影響を検討する。
- ・ピアヘルピングに関する資格取得を希望する学生に、カウンセリングの基礎知識やカウンセリングマインドについて勉強会を開催し、資格取得を支援しながら、学生のカウンセリングマインドを高めるようにする。それらをもとに、カウンセリングの基礎について学んだ学生には学習の前後で調査を実施し、学生のソーシャルスキルの修得やその傾向の分析をする。これらの結果をまとめ、学生が教育相談に活かすことができるよう、教育カウンセリング学会などで発表をするとともに論文にまとめ学術誌に発表する。

《研究課題 2》

アスペルガー症候群や ADHD など自閉症スペクトラム障害の子どもたちの自立に向けたプログラムの作成を試みてきた。また、これらの子どもたちと関わる大学生の支援やその効果について検討してきた。

今後さらに発達障害児に対する調査研究を継続するとともに、より効果的な支援プログラムへと発展させる。特に、就学前の「発達障害」の子どもたちや診断を受けていない子どもたちの可能性を広げるための支援者の早期のかかわりやグループ活動の効果について検討していく。また、母親が子どもの障害を受容していく過程や支援者とのかかわりが母親の心理的変化・発達に及ぼす影響について調査をする。これらの結果を基に発達障害の傾向を持つ子どもたちを支援するプログラム開発と、その子らの親を対象としたペアレントトレーニングという視点からの発達障害児の支援について考察する。そこで明らかになってきたことを心理関係の学会や学会誌に発表する。

《研究課題 3》

「発達障害」の診断を受けてはいないが、一般学生の中には発達障がい傾向をもつ学生がいる。このような学生は、対人関係や場の理解をする能力、将来を見通す能力に共通した弱さをもっている。そのため、このような学生をピックアップするため、これまでの研究で発表してきた見通し力尺度および就業意欲に関する尺度を実施する。そこで対象となった学生に、個別プログラムを作成する。このような学生のニーズに合わせて、話し合いのできる雇用先でのアルバイトを試みたり、そこでの失敗体験を具体的に聞き取り、社会スキルの解説やロールプレイングによる疑似場面を再現したりすることにより、対処スキルの向上を目指す。また、時間感覚の鈍い学生に対し、中間地点の目標作成や携帯電話のアラームやメモスケジュール等を活用し、時間の流れをチェックしながら管理させていく方法を試みる。大学等の教育機関のみならずハローワーク等でも活用が期待される尺度とプログラムを開発していきたいと考えている。開発した尺度の運用や応用に関して障害のある学生の心身の発達や学習の課程としてまとめ、心理関係の学会や学会誌に発表する。

○2011 年 4 月から 2019 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「自閉症スペクトラム障害傾向を有する学生のための「見通し力」尺度作成の試み」、日本学生相談学会、第 37 巻第 1 号、2016、27-36
- ・宗貞秀紀、堀篤実、吉村譲、肥田幸子、宮本佳範、手嶋慎介、松村幸四郎、研究所叢書 20 号『人が人らしく生きるために 人権について考える』唯学書房、2013、担当部分：第 2 章子どもの発

達と貧困、16-34

(学術論文)

- ・堀篤実「気になる子どもたちへの早期発達の援助の試み」、東邦学誌、第 44 巻第 1 号、2015、165-174
- ・堀篤実「発達障害をもつ子の自立にむけた生活スキル習得の試み—発達心理学の視点から—」、東邦学誌、第 41 巻第 2 号、2012、89-104
- ・堀篤実「ピアヘルピングに関する学習とソーシャルスキルの変化についての検討」、東邦学誌、第 41 巻第 1 号、2012、127-136

(学会発表)

- ・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹枝「ASD 傾向学生のための就業力尺度作成の試み（2）—尺度の再検査信頼性と妥当性の検証—」日本教育心理学会第 58 回大会 2016 年 10 月 9 日 日本教育心理学会発表論文集、478 頁
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹枝「ASD 傾向学生のための就業力尺度作成の試み（1）—項目の作成と信頼性の検討—」日本教育心理学会第 58 回大会 2016 年 10 月 9 日 日本教育心理学会発表論文集、477 頁
- ・鈴木美樹枝、肥田幸子、堀篤実「ASD 傾向学生のための就業力尺度作成の試み（3）—見通し力が就業力に及ぼす影響—」日本教育心理学会第 58 回大会 2016 年 10 月 9 日 日本教育心理学会発表論文集、479 頁
- ・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹枝「見通し力尺度作成の試み（2）—尺度の信頼性と妥当性の検証—」日本教育心理学会第 57 回大会 2015 年 8 月 27 日 日本教育心理学会発表論文集、572 頁
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹枝「見通し力尺度作成の試み（1）—大学生を対象として—」日本教育心理学会第 57 回大会 2015 年 8 月 27 日 日本教育心理学会発表論文集、571 頁
- ・鈴木美樹枝、肥田幸子、堀篤実「見通し力尺度作成の試み（3）—AQ 下位尺度が見通し力に及ぼす影響—」日本教育心理学会第 57 回大会 2015 年 8 月 27 日 日本教育心理学会発表論文集、573 頁

(その他)

- ・ガイダンスカウンセラー（スクールカウンセリング推進協議会認定）の資格を取得した（2011 年 7 月）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本心理臨床学会、日本学校保健学会、日本家族研究・家族療学会、日本発達心理学会、日本精神分析学会、日本教育カウンセリング学会、日本教育心理学会、日本学生相談学会、日本小児保健協会、日本健康レクリエーション学会、日本保育学会、日本キャリア教育学会

○自己評価

保護者のニーズに対応できる保育者・教育者を養成するため、学生の必要とされるソーシャルスキルについて継続的に調査している。また、専門演習でカウンセリングマインドについて学んだ学生には、その習熟度を測るため、資格取得と習熟度の関係について調べた。継続的に研究を重ね、コミュニケーション能力及びカウンセリングマインドをもつ保育者・教育者の養成に取り組んできた。しかしながらこれらの結果については今年度、関連学会等で発表するには至らなかった。次年度以降も検討を重ね、関連学会で発表していきたい。

発達障害をもつ子どもの継続的支援につながるプログラムの開発として、居場所づくりについて

検討した。また、発達障害傾向の大学生の就労支援に向けたプログラム開発においては、支援に向けた就業力尺度を作成し、キャリア教育研究（日本キャリア教育学会）に投稿中である。これらの結果、概ね目標を達成することができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

学部・所属委員会や学生相談に関与し、大学運営に貢献する。

（計画）

学部長補佐、教育学部執行部の一員として、学部長のもとに教育学部の運営や学生の教育に積極的に関わり、自ら考え、互いに学び合える環境づくりに努める。委員会関連では、積極的に委員会活動を実施していく。運営委員会では、委員の一人として、自覚と責任を持ち、大学運営に関わっていく。また、保育士養成課程委員会の委員長として、学生の一人ひとりが本人の個性を活かし社会から信頼されて活躍できるよう関わり、表現力豊かな保育者の養成に努める。保健・学生相談委員会の委員長として、教職員における適切な守秘義務と情報共有について検討していく。また、教職員と学生および保証人との信頼関係づくりに向けた研修などを検討していきたい。さらに学生相談では、学生および保証人のメンタルヘルスの向上に積極的に関わっていく。学生相談でのグループワークやロールプレイングを取り入れた活動を計画・実行し大学生やその保護者の充実した学生生活に貢献する。

○学内委員等

衛生委員会委員、運営委員会委員、学生・保健相談委員会委員長、全学教職課程委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員長、教職課程再課程認定委員会委員

○自己評価

保健・学生相談委員会委員長としては重要課題を（１）学生状況の把握（２）合理的配慮支援の充実（３）組織的な支援体制の確立とし、課題を整理し取り組みを行った。学生の心身の健康の保持・向上に向け健康診断や保健調査票の運用について取り組むことができた。集団守秘義務のもと必要に応じて学生の情報を共有することにより学部、演習担当教員、職員との連携もできつつあり、学生のメンタルサポートを充実させることができた。また、定期試験における「合理的配慮」の実施体制を作り、前期末および後期末試験において実施した。さらに試験のみならず、授業等における合理的配慮に関する支援までの流れの明確化と「障がい学生支援委員会」の新設を決めた。この他、学生相談室の活動においては演習担当教員に対し、担当学生および保証人への対応について相談に乗りメンタルヘルスに努めた。以上のことから概ね目標を達成することができた。

また、保育士養成課程委員会委員長としては重点課題として例年同様（１）保育士資格取得のための実習（保育実習ⅠＡ・ⅠＢ・Ⅱ・Ⅲ）を円滑に行う（２）実習について委員への周知と理解を図り、報告を行う（３）実習先の保育所・施設等と連携し、愛知県保育実習連絡協議会での実習先の確保と縁故での実習先の確保に努めた。また、今年度は児童福祉法施行規則第６条の２第１項第３号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法の一部改正、2019年４月１日の適用に合わせて委員の先生方の協力のもと2019年度からの新カリキュラムを作成し申請を行った。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

地域社会の人々のメンタルヘルスの向上や発達障害の研究が広く社会に役立つように臨床や啓発活動に努める。

(計画)

臨床に加えて講演などの社会啓発活動を積極的に行う。発達障児・者のグループ活動にディレクターとしてかわり障害児・者を支援するとともに支援者の養成にもかかわっていく。

○学会活動等

日本健康レクリエーション学会理事 2016 年 11 月～現在

○地域連携・社会貢献等

NPO 法人アスペ・エルデの会 ディレクター 2003 年 4～現在

○自己評価

NPO 法人アスペ・エルデの会ディレクターとして、発達障がいの子供たちとかかわり自立支援に努めるとともに、学生ボランティアの指導をした。また、日本健康レクリエーション学会の理事として学会の発展に貢献することができ、概ね目標を達成することができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

VI 総括

教員としての研究テーマは教育・保育職における子どもおよび保護者の心理的支援である。これは次世代育成支援の一つであり、子どもたちの未来へつながる重要な研究であると考えている。また、発達障害児・者にかかわる社会的活動も近年、地域・社会から要請され期待されるものである。これらの分野に少なからず貢献する研究・教育活動を継続することができた。

保育士養成課程委員会委員長として、保育士資格を希望する学生が全員取得できるように施行規則変更にともなう新しいカリキュラムの申請や実習体制の充実を行った。保健・学生相談委員会委員長としては合理的配慮の実施を行うことができた。

今後はこれらの研究および活動にさらに積極的にかかわり、大学の教員として邁進していきたい。

以 上